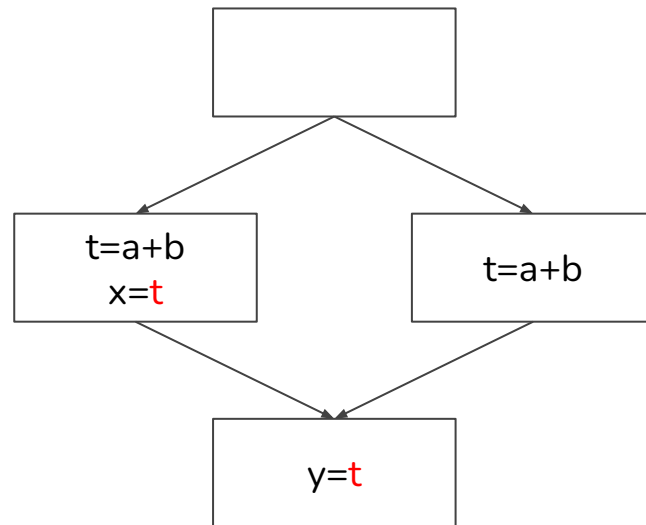
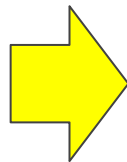
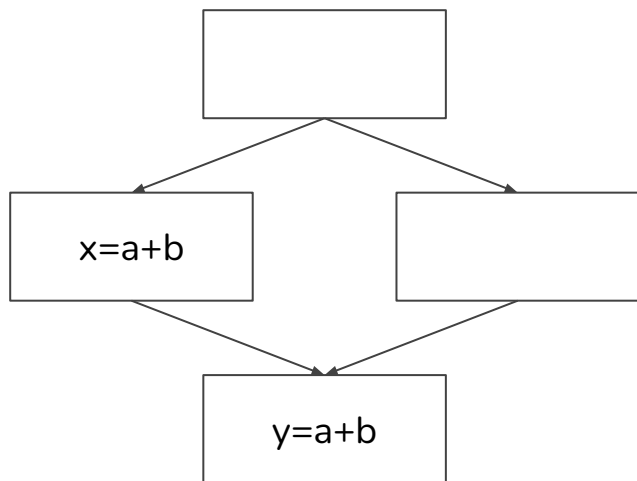


実行時情報を利用した 要求駆動型部分冗長除 去

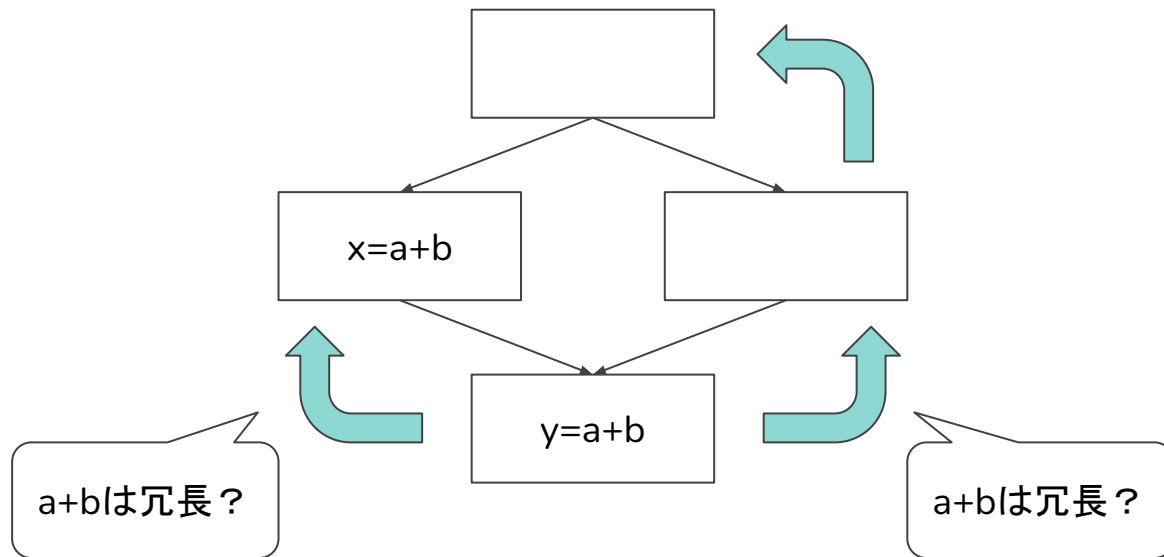
植村拓凧、澄川靖信
拓殖大学



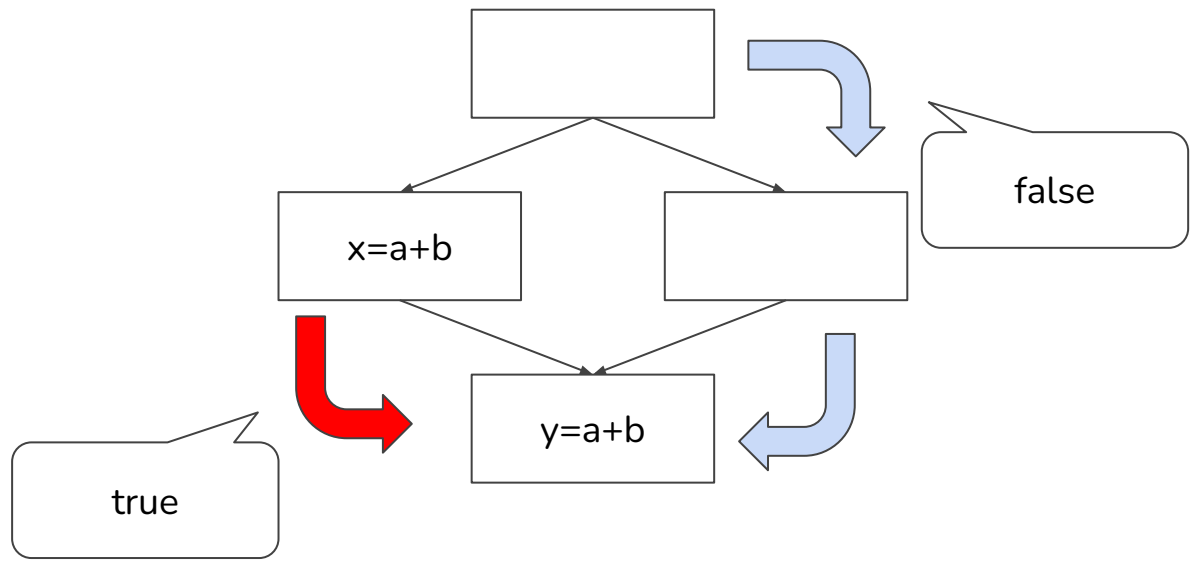
部分冗長除去 (PRE)



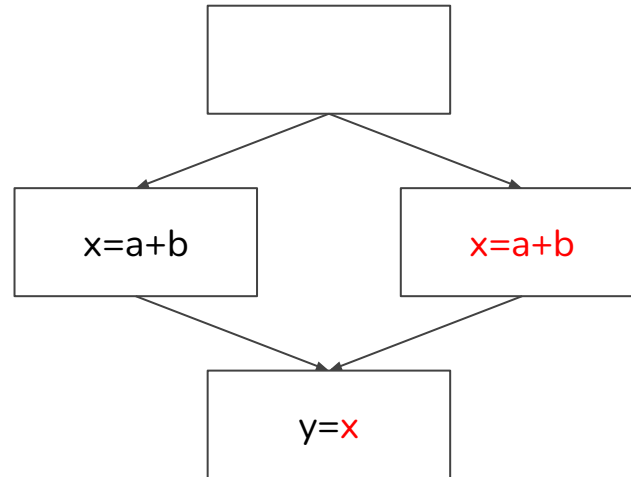
要求駆動型 PRE (DDPRE)



要求駆動型 PRE (DDPRE)



要求驅動型 PRE (DDPRE)





既存研究の限界

- ・質問伝播はCFGをトポロジカルソート順序で訪問する
- ・しかし、プログラムの実行回数は基本ブロックごとに異なる
 - PREの効果が低い箇所も解析しないといけない

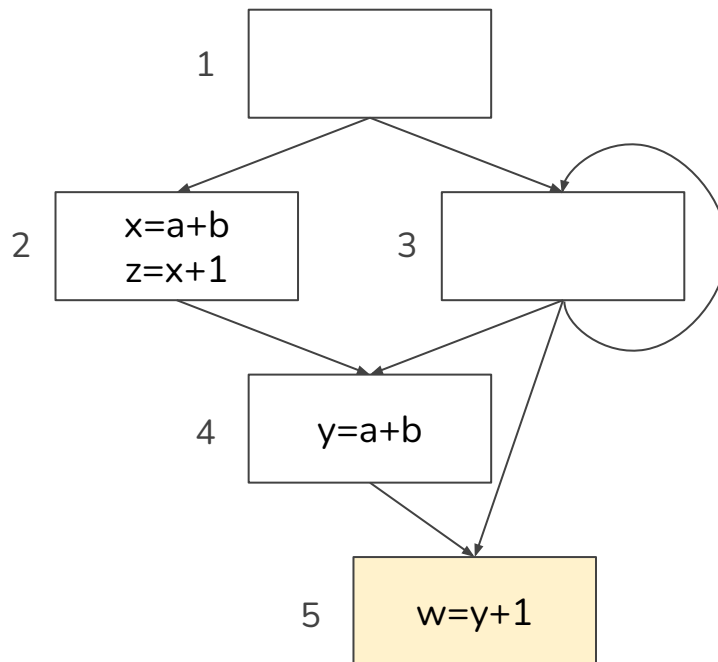


本研究の目的

- ・実行回数が多いところのみにDDPREを適用する
 - 解析対象を上位k%に絞ることができる
- ・各基本ブロックの実行時情報 (Profile) を利用したDDPRE (以降、PDPREと呼ぶ) を提案



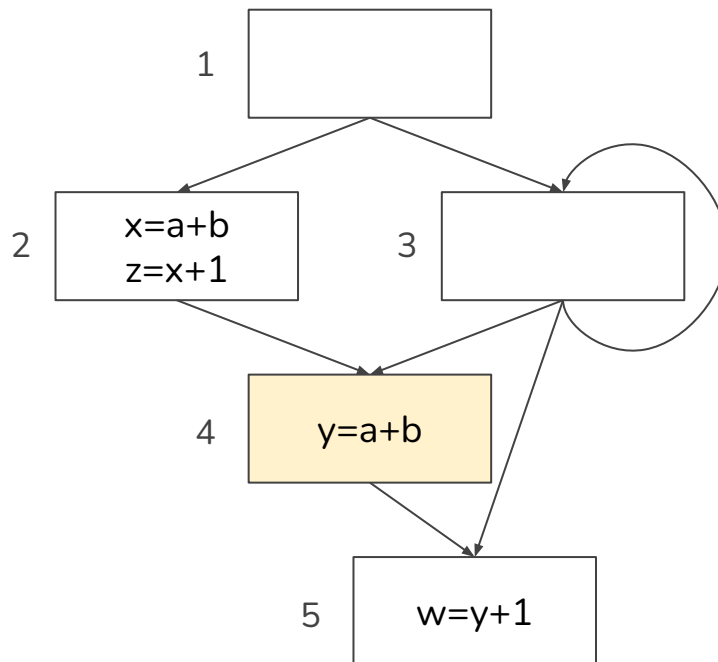
PDPRE | 訪問順



CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50



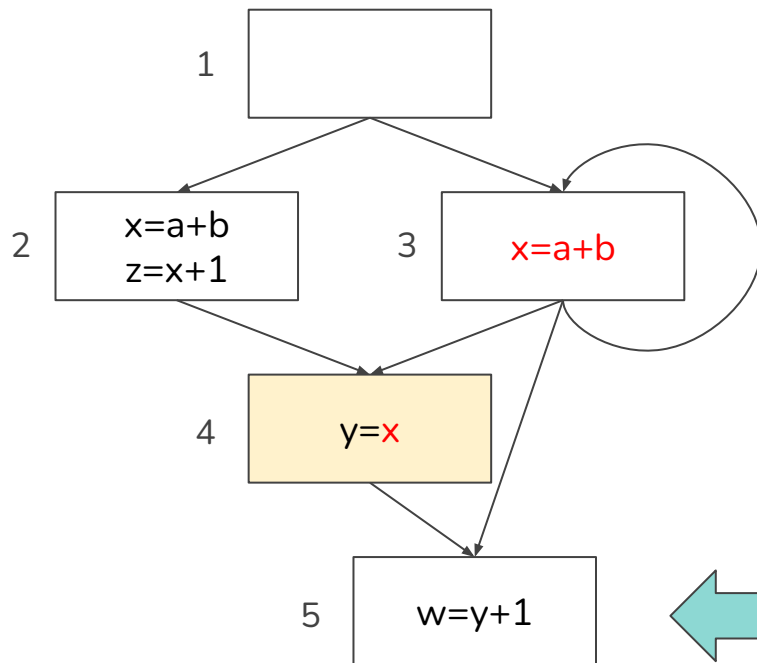
PDPRE | 訪問順



CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50

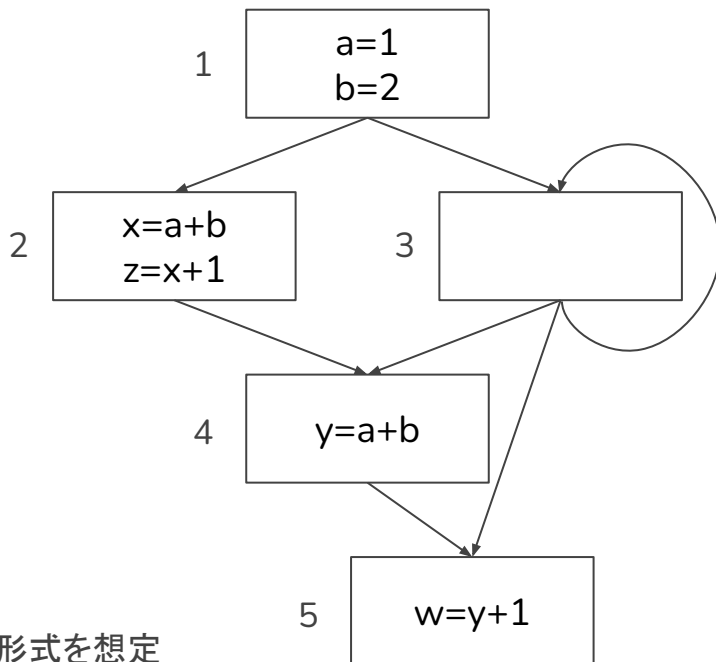


PDPRE | 訪問順



$w=x+1$ と同じ。部分冗長！

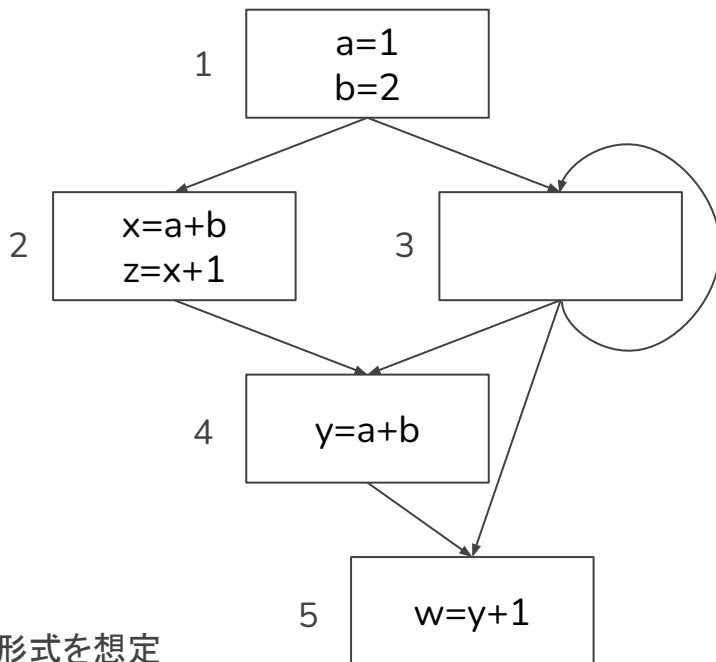
大域値番号付け (GVN)



項	値番号
$a=1$	{1}
$b=2$	{2}
$x=a+b$	{3}
$z=x+1$	{4}
$y=a+b$	{3}
$w=y+1$	{4}

※ 本来はSSA形式を想定

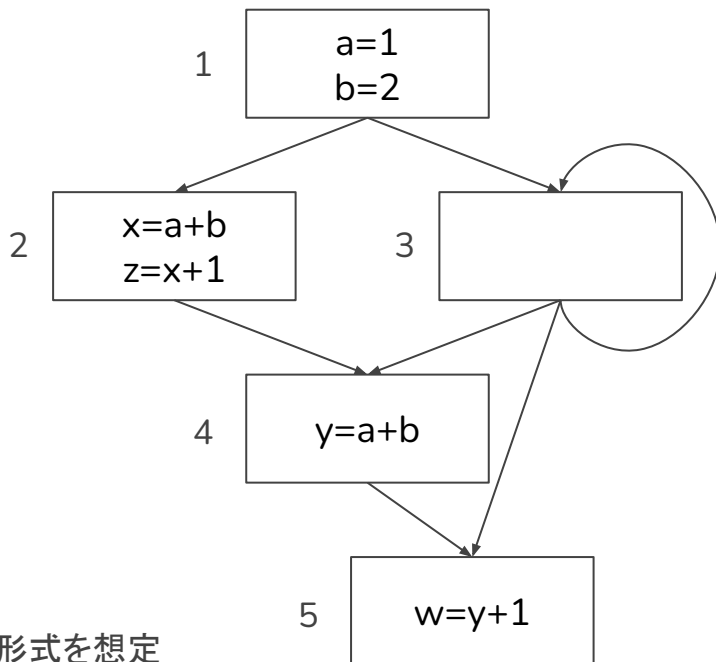
大域値番号付け (GVN)



項	値番号
$a=1$	$\{1\}$
$b=2$	$\{2\}$
$x=a+b$	$\Rightarrow \{1\} + \{2\}$
$z=x+1$	$\{4\}$
$y=a+b$	$\Rightarrow \{1\} + \{2\}$
$w=y+1$	$\{4\}$

※ 本来はSSA形式を想定

大域値番号付け (GVN)

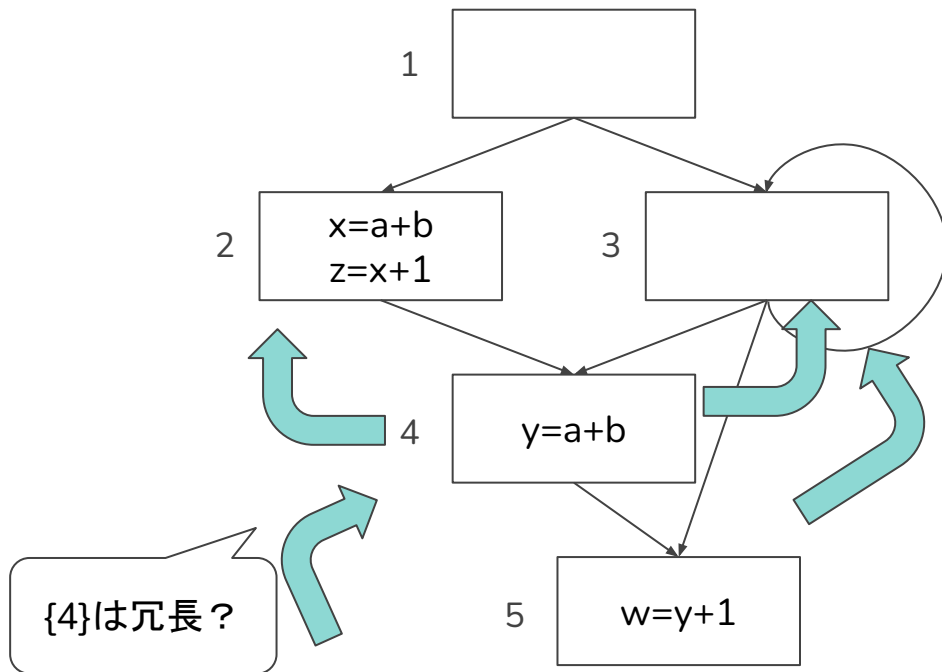


項	値番号
$a=1$	$\{1\}$
$b=2$	$\{2\}$
$x=a+b$	$\{3\}$
$z=x+1$	$\Rightarrow \{3\} + \{1\}$
$y=a+b$	$\{3\}$
$w=y+1$	$\Rightarrow \{3\} + \{1\}$

※ 本来はSSA形式を想定

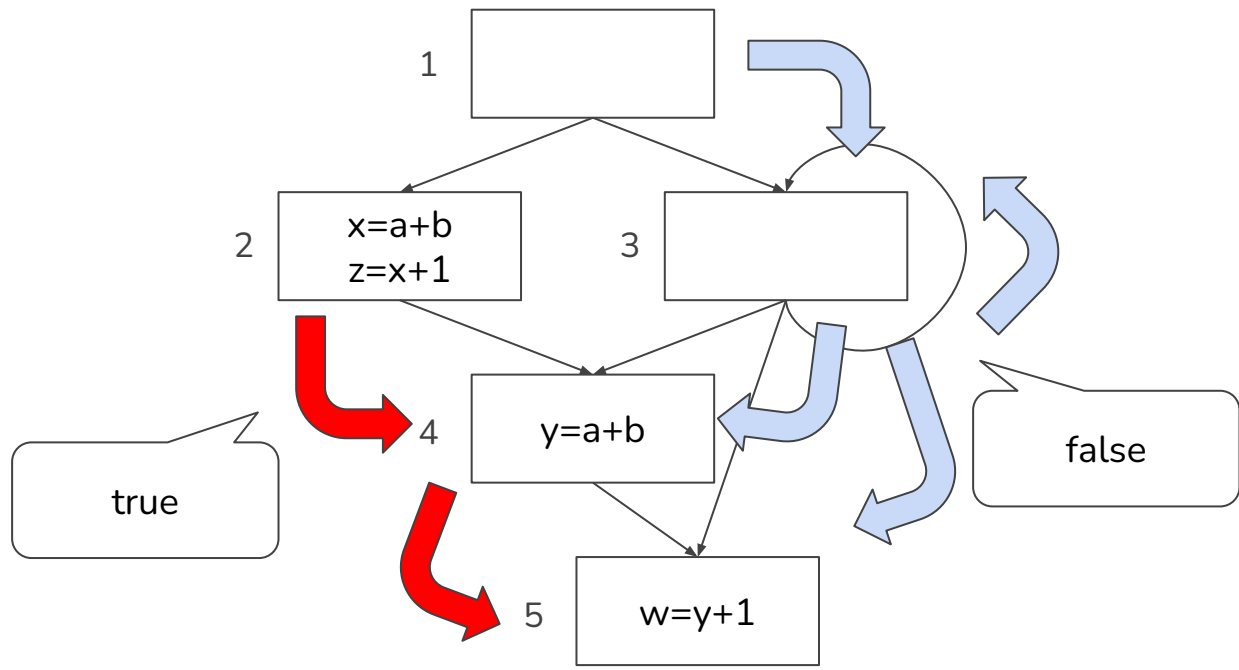


PDPREの質問伝播

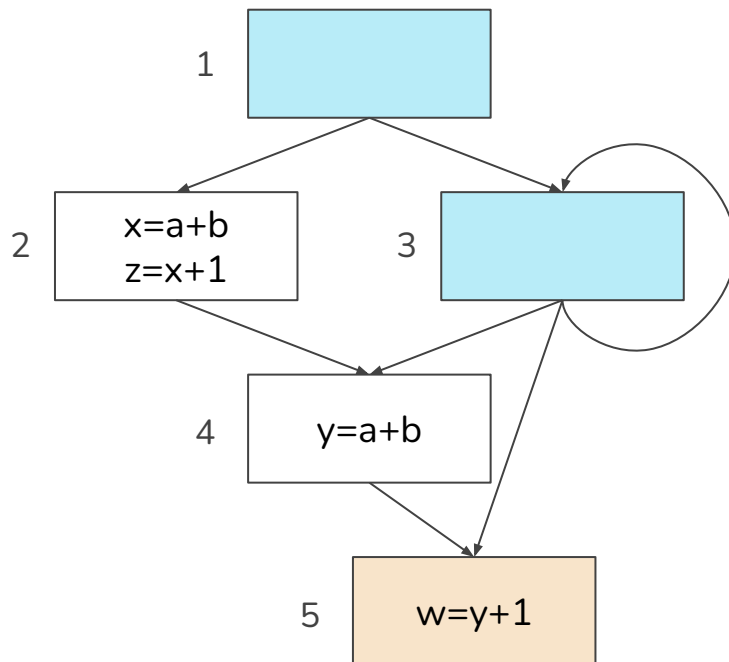




PDPREの質問伝播

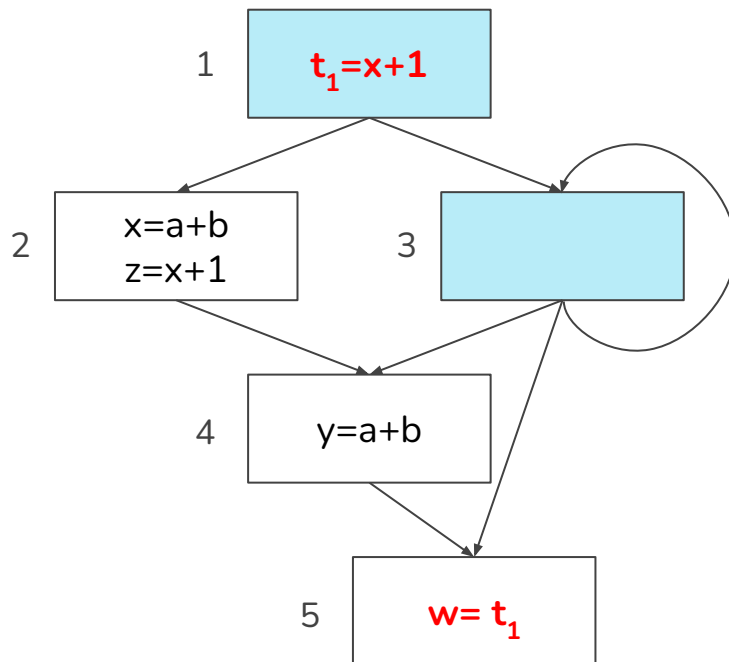


PDPRE | 挿入手順



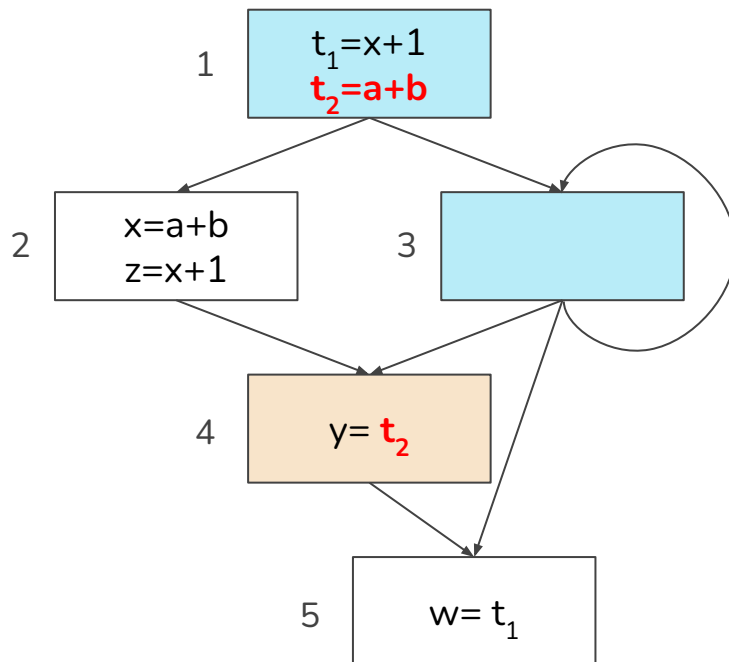
CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50

PDPRE | 挿入手順



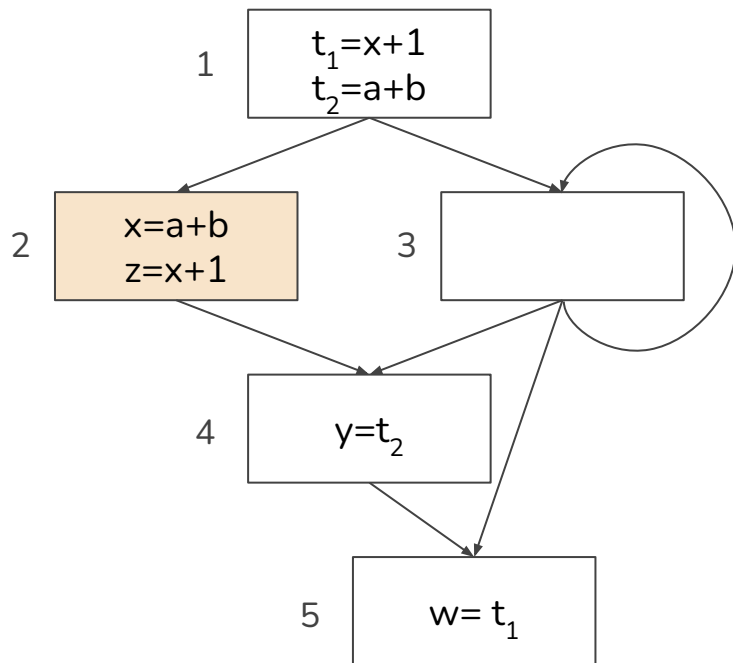
CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50

PDPRE | 挿入手順



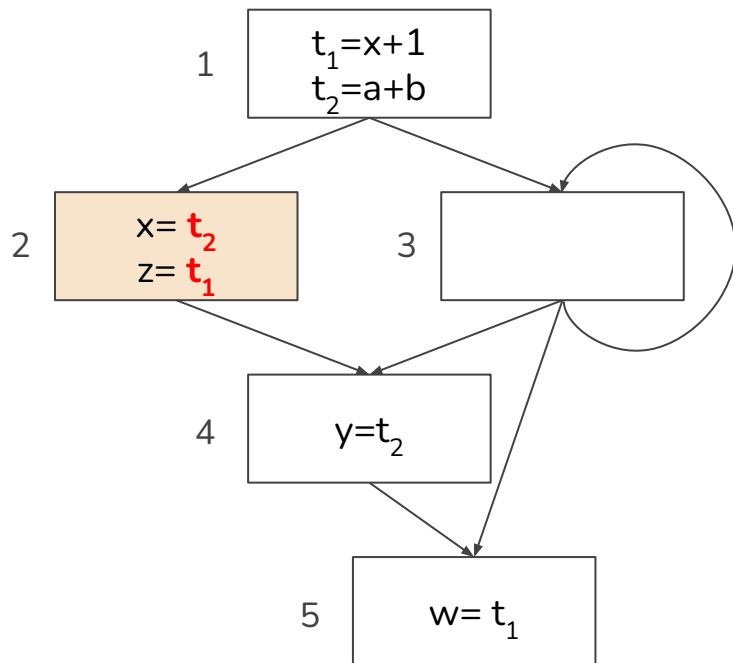
CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50

PDPRE | 挿入手順



CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50

PDPRE | 挿入手順



CFG節	実行回数
1	50
2	30
3	120
4	40
5	50



実験

- ・実験環境
 - ・OS: Ubuntu
 - ・Intel Corei7-8700K 3.70GHz CPU
 - ・ベンチマーク: SPEC CPU 2000 (10回実行した平均値を表示)
- ・比較対象:
 - ・PREQP[1]: ループ不変式のみ投機的にループ外へ移動する
 - ・LDPRE[2]: 質問伝播の解空間を束で定義したDDPRE



実験項目

RQ1: PDPREを適用する**上位k%のkとして良いものはどれ**か

= 目的コードの実行時間が短いほど良い。

RQ2: DDPREのうち、**解析時間と実行時間が良いのはどれ**か

RQ1 | 上位0~100%の実行時間(単位:秒)、赤字は最良結果

	100	90	80	70	60	50	40	30	20	10	0
gzip	76.7	75	75.2	77.1	74.4	75.5	75.9	76.5	74.9	74.4	74.7
vpr	51.2	52.1	52.3	51.4	51.7	51.8	51.7	52.5	51.6	51.2	51.1
mcf	23.9	24	23.8	23.9	23.6	23.7	24.1	24	23.5	23.9	23.9
parser	116	116.4	116.5	116.8	115.9	115.3	115	114.9	115.3	114	114
gap	59.9	59.9	60.1	60.3	60	58.7	58.7	58.4	59.8	60.2	59.9
bzip2	59.9	60	59.5	57.6	57.2	57.5	57	56.2	57.3	57.3	57.7
twolf	84	85.4	83.6	85	85.5	85	84.8	83.2	84.9	83.8	84.7
art	21	21	21	20.5	20.4	20	21.2	21.2	21.2	21	22
equake	33	32.7	32.2	33.2	32.5	32.4	32.3	32.3	32.3	32.4	32
ammp	82.5	81.1	79.4	82.1	81.6	81.2	81.1	81.3	81.8	80.9	80.7



議論

なぜ k の値が増えると実行時間が増加傾向になる？

- ・部分冗長を全冗長にした数が増えるにつれてレジスタスピルが多く発生した
→ 除去する数が増えればなるほど挿入する命令数も増える

除去数の多さとスピルの発生が実行時間に影響していると予測 ⇒ 解析対象を絞ったほうがいい

RQ2 | DDPREのうち、実行時間が良いのはどれか

	PREQP	LDPRE	PDPRE
gzip	75.3	77.2	76.5
vpr	50.8	53.2	52.5
mcf	24.4	24.1	24
parser	115	116.5	114.9
gap	59.1	59.4	58.4
bzip2	58.2	58.4	56.2
twolf	86.3	82.5	83.2
art	20.8	24.8	21.2
equake	33.8	40.5	32.3
ammp	80.9	81.4	81.3

RQ2 | DDPREのうち、解析時間が良いのはどれか

	A. PREQP	B. LDPRE	C. DDPRE	(A-C)/A	(B-C)/B
gzip	773	893	398	48.5%	42.9%
vpr	1,509	1,798	939	37.8%	67.9%
mcf	351	414	185	47.3%	53.0%
parser	1,366	1,615	640	53.1%	72.2%
gap	8,194	10,057	3,225	60.6%	90.3%
bzip2	295	462	124	58.0%	79.9%
twolf	5,775	6,914	2,139	63.0%	88.7%
art	131	126	91	30.5%	55.0%
equake	367	432	146	60.2%	79.1%
ammp	2,454	2,923	1,189	51.5%	70.3%



まとめ

- ・実行時情報を利用したDDPREを提案した
- ・PDPREは上位30%の適用が最良
- ・PDPREは他2つのDDPREよりも実行時間、解析時間の効率が良い

今後の課題

- ・PREでは除去できない冗長性を除去するための要求駆動型解析を利用する手法に実行時情報を利用できるように拡張する.